

今週のメニュー

■トピックス

◇国内最大級の環境展示会“エコプロダクツ2012”に6年連続出展！
ー塩ビブースをご紹介しますー

■随想

◇古代ヤマトの遠景（70）－【磐井の乱（3）】－

信越化学工業（株） 木下 清隆

■編集後記

■トピックス

◇国内最大級の環境展示会“エコプロダクツ2012”に6年連続出展！
ー塩ビブースをご紹介しますー

日本最大級の環境展示会エコプロダクツ2012（（社）産業環境管理協会、日本経済新聞社主催）が12月13日から15日までの3日間、東京ビッグサイト東ホールで開催されます。今年の出展者数は711社・団体、入場者数は18万5千人が見込まれています。

1999年にスタートした同展示会は、今年で14回目を迎えますが、今年のテーマは、「もっとグリーンに、もっとスマートに一選ぼう未来を」です。新しい未来のために必要なものを選択し、私たちの生活や社会に取り入れて行動していくことが重要で、その選択に必要な最新の環境情報を発信する場としています。

塩ビ工業・環境協会（VEC）と塩化ビニル環境対策協議会（JPEC）は、過去5回連続して出展し、塩ビ製品（PVC）の環境性能やその優位性を訴求し、環境を軸にした塩ビ製品の新たな可能性を訴えて参りました。連続して出展してきたことにより、塩ビについての理解が進み、イメージを明るくすることが出来たと考えています。6年連続出展となる今年は、「PVC！環境特性に優れたエコ素材」と題して、塩ビが未来へ選択されるべき環境素材であることを訴求したいと考えています。



今回のブースでは、以下の5つのコーナーを設けています。

1. 社会インフラを支える PVC
2. 持続可能な社会の実現に貢献する PVCー長寿命・リサイクルー
3. 省エネで快適な住環境を提供する PVC
4. 豊かな生活を演出する PVC
5. デザインで新しい可能性を追求

1～4の4つのコーナーを塩ビ波板の円筒ドームの中に配置し、各コーナーに300～600φの塩ビパイプをパネル、展示台にしています。このドームの中心には、塩ビが使われる様々な場面を、ベント管を覗いて見るクイズ形式で紹介します。5つ目のコーナーは、円筒の外側に配置、“PVC Design Award 2012”の入賞作品を中心に、塩ビの新しい可能性を追求した作品を展示します。また、2012年に話題となった製品も入っています。

私どものPVCブース（東5ホール、No.5-001）へのご来場をお待ちしております。詳しくは、下記の案内をご覧ください。

[エコプロダクツ2012](#)

■ 随想

◇古代ヤマトの遠景（70）－【磐井の乱（3）】－

信越化学工業（株） 木下 清隆

<安閑・宣化の即位はなかった？>

前回、欽明天皇の即位年は、五三一年である可能性が高いことを示したが、そうなると、継体後の安閑・宣化両天皇の即位は無かったことになる。記紀に記載されているくらいだから、両天皇の時代はあったとの考え方は当然あり、欽明朝と安閑・宣化朝が並立していたとの説も出されている。それでは実際はどうだったのだろうか。これについては先に簡単に紹介したが、継体天皇の没年に関する書紀撰述者の割注が大きなヒントになる。その内容は、

「或本に云わく、天皇、二十八年歳次^{きのえとら}甲寅に^{かむあが}崩りましぬといふ。而るを此に二十五年歳次^{かのとい}辛亥に崩りましぬと云へるは、百済本記を取りて文を為れるなり。其の文に云へらく、……又聞く、日本の天皇及び太子・皇子、俱に崩薨りましぬといへり。此に由りて言へば、辛亥の歳は、二十五年に当る。後に^{かむが}勘校へむ者、知らむ。」

となっている。この割注の内容は要約すれば、

〔継体天皇の崩年は、或本では二十八年となっているが、私が二十五年としたのは、百済本記に二十五年と出ているからである。……このとき、天皇と太子と皇子が同時に亡くなられたとも記されている。このような継体崩年の違いについては、後世の人に考えてほしい。〕

といったものである。この中で天皇・太子・皇子が同時に亡くなったとの記述は重要である。この百済本記の内容は、『上宮聖徳法王帝説』の内容を正しいとするなら、ここの記述も正しいとせざるを得なくなる。そうなると安閑・宣化の両天皇は天皇に即位することなく亡くなった、もっとはっきり言えば継体天皇の没後、何者かによって殺されたことになる。

このように考えると、継体天皇の後には、直接欽明天皇が後継者となり、複雑怪奇な年代問題はすっきりと解決されることになる。このような粗筋が史実をある程度再現しているとするなら、歴史の具体像もある程度再現が可能となってくる。その具体像は次のようなものだったのではなからうか。

<磐井の乱の真実>

継体十八年（五二四）に、新羅が南部国境地帯に侵攻し、このとき喙己吞^{とくことん}が破られた。この事件発生に驚いた金官国は何度も倭国に対し、救援軍の派兵を要請した。九州地方の平定も一段落した継体天皇は、磐井に金官国支援派兵について意見を求めた。これに対する磐井の返答は以下のようなものだったと想定される。

「半島の鉄資源は、既に倭国内の鉄供給体制が整備されつつあり、その戦略的価値は低下してきています。また、倭国の半島でのプレゼンスによる朝貢型支配体制は、高句麗・百済・新羅の三巴戦の余波で百済と任那諸国からの支援要請が相次ぎ、最早、維持できない情勢になっています。更に、もし倭国が要請に応じて支援したとしても、その人的・経済的負担は半島の権益程度ではとても補えない状況です。このような理由から、倭国は今後一切半島から手を引くべきだと考えます。」

といった内容だったのではなかろうか。要するに、半島関与政策を放棄すべしという内容である。磐井にしてみれば、天皇と自分との信頼関係から、この程度の進言はすべきと判断したのであろう。継体天皇にしてみれば、自分の代になって祖王達が築き上げた半島の権益を失うことは申し訳ない。しかし、磐井の主張も理解できる。

この場合、継体天皇が応神王家の流れを汲む王だったとすれば、応神王家がそうであったように、半島への関心はそれほど強くなかったに違いない。しかし、継体王家の半島への関心は深く、彼らのこのような半島傾斜の心理からみて、彼等は出雲王家につながる可能性があることを示している。このことは先に尾張氏との関係からも想定した通りである。それは半島への進出を果たしたのが出雲王家時代だったからであり、そのことがこの王家に繋がる者の誇りだったからであろう。

磐井の進言に継体天皇は苦悩し、半島支援、具体的には金官国への支援を躊躇する。継体天皇の半島への思いは具体的には示されていないが、近江毛野臣^{あふみのけなおみ}の六万の出兵などはその一端を示すものといえよう。この出兵は先に示したように創作譚であり、磐井の乱の伏線として用意されたものであるが、書紀の編者は継体天皇の半島への思いの深さをこのような数で表わしたのかも知れない。

金官国への支援を躊躇している状況の中で継体天皇は崩ずる。五三一年のことである。天皇の崩御を聞き、倭国からの支援をあきらめた金官国は翌五三二年、新羅へ投降する。

継体天皇崩御後、後継天皇をどうするのかの論議が当然あったはずである。更に問題となったのは、金官国の支援問題をどうするのかであったと想定される。この時点では、未だ金官国は投降していないからである。磐井が主張するように「半島放棄政策」を採ってこれを見捨てるのか、支援軍



上：岩戸山古墳広場の石人・石馬（レプリカ）
下：石人・石馬（歴史資料館蔵、本物）

を送り半島の權益を堅持する「半島堅持政策」を採るかであったと考えられる。このときの半島放棄派は^{まがりのおおえ}勾大兄皇子・^{ひのくま}檜隈高田皇子達（記紀では後の安閑・宣化天皇とされている皇子達）だったと考えられる。彼らは現実的な視点からこの問題を考え、名分として磐井の論理を押しながら、現実問題として大規模派兵は不可能と見ていたからではなかろうか。

継体朝は国造を中心とした国家体制が整備されつつあった時代だといえるが、このような時代の海外派兵は応神朝の派兵と異なり、倭王家がほとんどの出費負担をしなければならなくなっていた。その昔であれば各地の豪族たちが、兵士から食料からおそらく船の準備まで、全ての負担を引き受けた。しかし、継体王家の時代は、兵士は各地に割り当てることが出来たかもしれないが、船舶・武具・食料その他の多くのものは、国造の差配という形で倭王家が負担したはずである。万単位の兵となれば諸国の手持ちの船だけではとても足りず、多くの造船が必要である。当時であれば馬の同道も増えているはずであり、船数は更にふえる。

欽明十五年正月条に、「兵一千、馬百匹、船四十隻」を百済に送る用意あり、と記載されており、これから判断すると、兵一万で船四百隻となる。二万で八百隻である。この数を近江毛野臣の兵六万に当てはめると、船二千四百隻にもなる。このような数の船をどこで誰に造らせるのか。考えただけでも大変なことであり、これだけの大船団を近江毛野臣が一人で率いるなど、如何に絵空事であるかがわかる。

このように騎馬兵が主体となってきた時代の渡海は、四世末の半島派兵と比べ、技術的にも一層困難な要素が加わってきたといえよう。その他、兵站の準備も考えれば、二の足も三の足も踏む状況だったと考えられる。しかも、継体天皇の東奔西走の活躍でやっと国の中が収まってきたばかりである。諸国に無理強いするのは心苦しかったに違いない。

このような理由から二人の皇子達は、半島放棄論を主張したのではなかろうか。大伴氏・物部氏は行政官として常に現実に目を向けている立場であり、この考えに賛同したと見られる。しかし、この半島放棄論に反対する勢力が当然、存在した。

(つづく)

この「古代ヤマトの遠景」に対し、ご意見・ご感想を頂ければ幸いです。>> [\(筆者\)](#)

「古代ヤマトの遠景」：[バックナンバー](#)

■ 編集後記

二つの突然、野田首相の「解散宣言」、石原都知事の「辞任」によって、ただでさえ忙しい師走がいっそう気忙しく感じられます。「政権選択、冬の陣」という見出しで始まったので、どういう合従連衡かと思えば、多党乱立。多くの主張を聞き分けるのはたいへんだなと思っても、16日（日）にはもう投開票です。皆さんもお忙しいところとは思いますが、その前日までの3日間、13（木）、14（金）、15（土）は、東京ビックサイトのエコプロ展に足を運んでみてください。（鈴蘭）

■ 関連リンク

- [メールマガジンバックナンバー](#)
- [メールマガジン登録](#)
- [メールマガジン解除](#)



◆編集責任者 事務局長 東 幸次

■東京都中央区新川 1-4-1

■TEL 03-3297-5601 ■FAX 03-3297-5783

■URL <http://www.vec.gr.jp> ■E-MAIL info@vec.gr.jp
